當時の宇治川は後の世のそれのやうに、悠々と穏かな相をもつた大河ではない。河幅もずつと廣く、河原は年毎の洪水にまかせ、流れの迅さ深さ嶮しさ、さながら、原始時代のまゝだつた。

たゞ幾分か、人工が加へられてある所は、今、義經が立つてゐるこゝ平等院の北の邊り――土民が富家の渡しと稱んでゐる岸だけであつた。

こゝには、往來のため長い橋が架けられてある。

しかし橋板はもちろん對岸の敵がのこらず引いてしまつた。又、渡河の攻口としては、地形や水勢から見ても、この附近しかない事は分つてゐるので、敵は、こゝの橋杭を中心として、上流下流の數町にわたつて、あらゆる障碍を水底に設けてゐた。

『なんの、これしきの河』

坂東武者はみな氣負ひたつて、義經の令をむしろもどかしげに待ち焦れてゐたが、義經は、

『いや、難しい』

と、正直に自然を怖れ、先に、馬を降りてしまつたのであつた。

兄の範頼を瀬田にのこし、彼の軍は、伊賀路から笠置を經て、宇治に屯し、けふ正月の二十日、いよいよ渡河を決意して、此富家の渡しまで押出して來たのである。戰略上、兄の範頼のはうでは、

『兩軍、合せて四萬』

と、稱へてゐるが、實數はその十分の一、四千餘りの兵數でしかなかつた。

それを義經が、正直に、

『瀬田口に二千五百を向け、宇治川へは一千五百をひいて行く』

と、誰にも、有のまゝ實數を云ひふらしたといふので、範頼は腹を立てゝ、

『九郎殿は、餘りにも兵法の辨へが無さすぎる。あんな事で、宇治川の備へを破れようか』

と、陰で怒つたといふくらゐである。

實際兵力の不足は範頼も義經も最も苦心してゐたところだつた。

木曾方も、寡兵であるが、守備よりも攻撃する側のはうが、それに數倍の兵力を要することは戰の原則である。

それなのに、義經はなぜ、敵方の士氣をよろこばせるやうな味方の弱點を、わざと云ひふらしたのだらうか。

彼の答へは簡明であつた。

『――義仲を、都のうちに、繋ぎ止めておくための流言にすぎぬ。兵法は嘘のみと思ふは誤り、正直もまた兵法であるのだ』

二

水中にはいつた半裸體の兵ばらの使命は、生死を超越しなければできない作業だつた。

ひろい奔流の諸所には、うかとすれば、すぐ生命を捲きこんでしまふ恐ろしい死の渦が卷いてゐる。

その水はまた氷の如く冷たくて手足の知覺も忽ち失はれてしまふ。

彼等は、その寒さや危險を冒しながら、身を沈めては、河底に張めぐらしてある無數の繩を斷ち切つた。亂杭を拔いて押し流したり、割竹の堰を破つて、柴の束や材木の障碍などを取り除いたり、浮きつ沈みつ、さながら神のやうな姿で働いてゐた。

『あれよ、下流のはうへ、又一名流されたぞ。誰ぞ、救つてやれ』

義經は、それ等の名もない雜兵の必死な働きを見てゐると、眼が熱くなつた。

對岸の敵は、

『すはこそ』

と、射手をそろへて、河中の兵へ、箭をあびせかけた。そのために、作業は一しほ困難を極め、最初にはいつた工兵の半數はもう死體となつて流されてゐた。

もちろん義經の身をも、矢うなりは絶えまなく掠めてゆく。

『楯のお内へ』

と、頻りに、周りの武將たちが、さつきから諫めてゐたが、耳もかさず、河中の兵に、熱い目をそゝいでゐた。

『――御大將が見てゐる』

死も生も考へない決死の兵ではあるが、義經がそこにあることは、勇氣を百倍にさせた。

同じ死ぬにも、歡んで死ねるのであつた。

孫子の曰ふ、

用兵の極致は、兵をして、

歡んで死なしむにあり。

意識的でなく、將としての義經の言動には、そのことばと合致するものがあつた。

戰に立つ運命はひとつである。こゝに立つからには、死は、怯勇無差別に向つてくる。

歡んで死ねる兵は、末代、そのたましひに生きがひの歡びをつないでゆくだらう。

義經は、ひとつ〳〵、矢に中つて、浮いては流れてゆく死骸に、

『おまへ達のいのちを、この後とも、あだにはせぬぞ』

と、胸に念じた。

『重忠、重忠。――陸からでは手ぬるい。あれまで射手をすゝめて、敵の足搔きせぬまで、射て射て、壓倒してしまへ』

矢風の中からいふ彼の聲は、自分も身を挺して、すでに敵前で戰つてゐるやうな悲調とあら

い語氣をおびてゐた。

『拔かりましたつ』

畠山重忠は、さう云はれて、初めて味方の掩護が、まだ手ぬるいものであつた事に氣がついた。

『橋桁へ立て。あれなる橋桁の上を進んで近々と射よ』

と、自分の隊へ、大聲で命じながら、手を打振つた。

すると、熊谷直實の部隊も、澁谷右馬允の隊も、平山武者所の手の者も、いつせいに弓を持つたまゝ、橋板のない橋桁の上を、先を爭つて馳けて行つた。

弦音をそろへて、そこから對岸の敵へ、猛烈に射返した。

そこからの掩護は的確にきゝめがあつた。忽ち、敵の矢數は減つて來た。飛んでくる矢にも最初ほどな弓勢はなくなつた。

河中の兵たちは、殆と、目的を達して、瀨や淵の水深まで測つたうへ、紫いろの顏をして、

やがて續々陸へ這ひあがつて來た。

三

その機に、對岸でも、布陣を革めてゐるらしく、しきりに兵馬の移動がながめられたが、やがての事、前にもまして弓勢が、河面も晦くなるばかり箭を射かけて來た。

『箭道に立つな。上流へ寄れ。一様に各々駒の列を、もそつと、上流へ竝べ立てい』

義經は、馬上から指揮に聲をからしてゐた。われこそ一番にと、流れを前に、河原へむらがり立つた各部隊の騎馬武者たちは、ひとしく鐙からのび上つて、彼の高く振る手を横にながめた。

『上流へ寄れ』

『もそつと寄れ』

千餘騎の横列は、馬首をそろへたまゝ、順に横へ横へ押しあつた。そして約半町ほど陣列が移ると、

『それつ、押渡れ』

と、各隊の將が、義經の手を遠く見て、一齊に令を下した。

ざんぶと、一列にしぶきが上つた。

大きなうねりの波が河面を岸から擴げてゆく。味方の鎧と鎧、鎧の袖と袖とが揉み合ひ、もつれ合ひ、眞つ黒に、激流を埋めて行つた。

『――今だ！』

平等院の小島ヶ崎から、一騎、鞭を打つて馳けて來た侍があつた。

すると又、一方の森陰からも、征矢のごとく河原へ向つて馳け出した一騎がある。

二騎は近づいて、駒足をそろへた。そして、顏を見あはせた。

『やあ、梶原どのか』

『オヽ、佐々木どのよな』

さすがに、今日のみは、にこと笑みあふ餘裕も持たない。

景季は、ひそかに、

『高綱におくれてならうか』

と、思つてゐるし、高綱も、

『彼に名はなさしめぬ』

と、この宇治川へかゝる前から固く自分に誓つてゐるのである。

わざと、部隊を離れて、ほかに渡る戰友の影もない下流の水路を選んだのも、約束したやうに、ふたりの考へが暗合した。

馬の力が弱ければ、勢ひこの激流では、河のまん中まで進むうちにも、かなり下流へ流される。それ故に、障碍物をとり除いた水路よりもだいぶ上流へ移動して大勢一かたまりに渡河にかゝつたものであるが、佐々木高綱と梶原景季のふたりは、十分、馬の力に自信があつた。

――で、むしろ味方同士の邪げがない下流を選んで、自分一騎だけはと、やにはに丘の陰から馳け出したのであつたが、何ぞ計らん、さう考へた者は、自分だけではなかつた。

『景季もやりをる』

『高綱もぬからぬ男』

無言のうちに、ふたりは負れを誠めた。もつとその感想を露骨にいふならば、お互に自分の相手を、さすがと尊敬し、小賢なと憎み、そして油斷ならじと怖れ合つた。

悍氣の立つた生唼も磨墨も、水面から立つ狂風に吹かれると、たてがみを強く振つて、いなきぬいた。

生唼は、水をきらつて、どうしても河へはいらないのである。

景季の磨墨は、馳け足をもつたまゝ無雜作に淺瀨を蹴だてゝもうざんぶと平首のあたりまで流れに沈んでゐた。

『しめた』

景季は、巧に、水馬の技術をこらして、樂々と馬を泳がせながら、後の岸をふりかへつた。

高綱はまだ、焦れ狂ふ生唼の鞍上に、齒がみをしながら、手綱をさまざまつかひわけてゐた。

四

強く、一鞭加へると、生唼は勢よく水へ向つて馳けこみ、高綱は、眞つ白に飛沫をかぶつ

た。

――が、すでに景季の磨墨は、數十間先をとつて、あざやかに泳ぎ渡つてゆく。

『不覺。おくれては』

と、高綱はあせつた。

『あれほど、廣言吐いて、御愛馬を賜はつてをりながら、先陣は景季に取られたりと聞えては、一代の名折れ』

と、恥を思つた。

兜の眉庇を俯向けて、高綱は必死の唇をむすんでゐた。

河波は、横ざまに搏つてくる。岸を離れるほど流れは激してくる。怖ろしいのは、渦まくそれよりも、寸斷された障碍の繩が、なほ藻のやうに浮游してゐるので、それが馬の四肢に搦みつくことであつた。

『おゝうい』

『えゝゝい』

『おうい』

その時、上流から乘り入れた千餘騎は、一團また一團、亂れ合つて、波濤とたゝかふ無數の筏のやうに、河面を埋めて、次第に下流へ下流へと流されて來た。

景季、高綱の二騎も、やがてその馬群のなかに卷き込まれてゐた。もうこの大河の一番乘は景季ひとりが相手ではなかつた。高綱ひとりが目標ではなかつた。――三浦、熊谷、畠山、足立、平山などの諸將をはじめ、その部下にいたるまでが、われ負れじと、競つてゐた。

義經もその中にあつた。

畠山庄司重忠は、自分の功名は捨てゝ義經のそばへ、ひたと駒をよせ、義經の司令と共に、聲を接けて、渡河中の全軍へ、始終、水馬戰の注意をさけんでゐた。

『――馬と馬とは、寄りあうて、馬筏を組みて渡せよ。健き馬は上流手に泳がせ、弱き馬はゆるやかに、その尾について、無理さすな』

矢うなりは、風をきる。波しぶきは、聲を消してゆく。

義經と重忠とは、時折、渦まく濁流のなかに駒を止めて、全軍を見まはした。一兵でも惜し

むやうに、溺れる者や、矢に斃れ去る者を、眼に傷みながら、なほ聲をふりしぼつて、水馬に馴れない兵たちに教へた。

『――馬の足の屆くまでは、手綱をゆるめて泳がせよ。手綱强めて、誤ちすな。尾口沈まば、前輪にすがれ、水あし急に塞がれなば、馬の三頭に乘下り、鞍つぼ去つて水を通せ』

重忠が聲を疲らせてしまふと、義經が又云つた。

『――敵は射るとも、河中にて、弓は射返すな。うち俯すぎて、兜の頂邊を射られるな。水のうへにて身づくろひすな。物の具に透間あらすな。――弓と弓とを持合うて、前なる馬の尻輪に、うしろの馬の頭を持たせて、息をつがせよ、息つぎ合へよ。――人の馬にからみて二人ながら押流されるな。逆渦のながれに溺れかけたる友を見ば、弓を差伸べて救け合へや！』

こたへろ諸聲は、雲に谺し、いなゝく馬の聲は、宇治川の瀨々に、白い波がしらを寄せに寄せて行く。

先だつ群、後れてゆく群、たくさんな馬筏は、はやくも河のなかほどまで押し襲せた。

敵は射る。

まるで驟雨のやうな矢であつた。

――と見れば、一騎は、すでに馬筏の先鋒を離れて、はや、敵の顏もあざやかに見える岸近くまで進んでゐた。

梶原景季の麿墨である。

『オヽイつ。梶原つ』

高綱は、そのうしろに迫りながら、呼びとめた。

五.

うしろの高綱は、又、

『やあ、危いぞ梶原。この大事な河渡しに、鞍蹈み返して溺れたら、敵味方の笑はれぐさ。――腹帶を締め直さぬか。御邊の馬の腹帶が弛んで見ゆるに』

それには景季も、ためらはずに居られなかつた。

彼は、弓を口にくはへて、鐙に足を蹈んばつた。そして鞍腰を上げながら、腹帶の結びめを

詰直してゐたが、その間に高綱は、先を取つて、河を打渡つてしまつた。

生嗟は、水を切つて、對岸へをどり上つた。

『――佐々木四郎高綱先陣。――この宇治川の先陣、佐々木四郎高綱つ』

呼ばはる聲と共に、そのすがたは敵の中に沒してゐた。

『してやられた！』

景季は、齒がみをしながら、二番めに刎ね上つて、そのまゝ敵の中に突入した。

三番四番はもう誰とも分らないほどだつた。鼻さきを揃へた悍馬の群は、すさまじい武者聲を乘せて敵の正面へぶつかつてゆく。

これ迄のあひだ、敵もむなしく見てゐたわけではない。主將は、木曾方でも聞えのある根井行親だし、部下にも强者は少くなかつた。

けれど時代の黎明を意識した新鋭の若さと、木曾軍の强さとは、比較にならない違ひをこの實戰で見せた。

戰ふ上に全體的な信念を持つ兵と、戰ふにたゞ個々の猛勇と個々の結果しか考へられない兵

との相違である。

決死の渡河を行つて來た敵を見ながら、前線に射手をならべて、矢ばかり射てゐたのも不覺の一つであつた。

それに反して、義經の兵は、人馬共、濡れねずみのまゝ、

『息をつかすな』

とばかり追擊又追擊して――一部は木幡から醍醐路へと追ひまくし京の阿彌陀ヶ峰の東に出で、又他の一部隊は、小野から勸修寺を追ひかけて七條へ突入した。

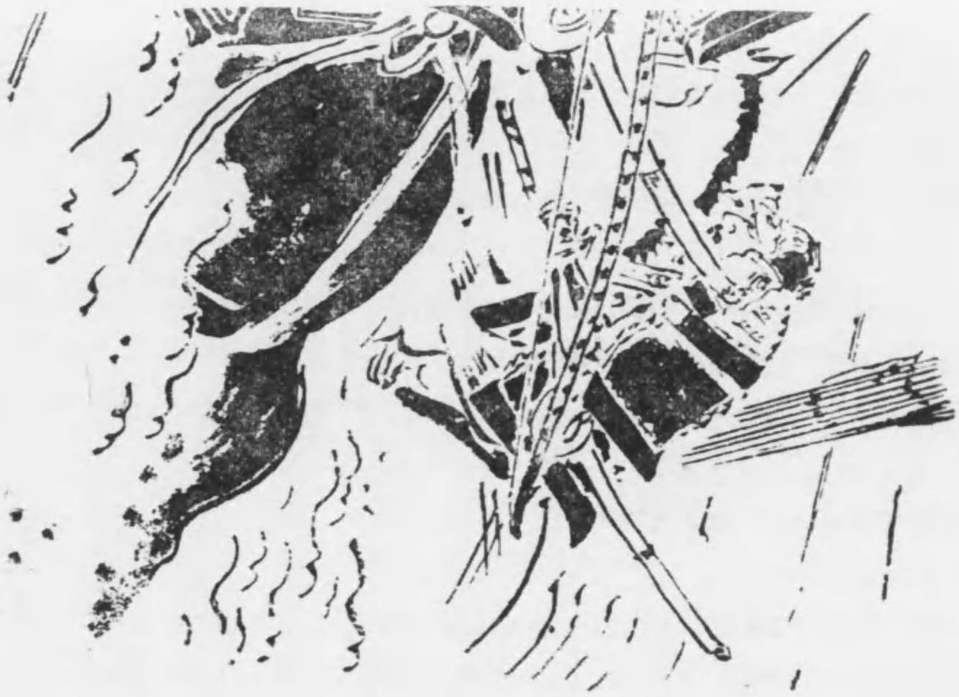
深草や伏見邊へ、少數で迷ひ出た兵もある。何しても、逃げる敵は道を選ばないので、急追した義經のはうも、八方へ分裂して、京都へはいつた。

宇治川の敗報を知ると、義仲は、

『すは』

と、今更のやうにあわて出した。彼の面上には、すさまじい自暴自棄のいろが漲つてゐた。

その血相をもつて、彼は、院の御所へ馳けつけ、法皇に對し奉つて臨幸を强請してゐた。



けれど法皇には、お肯き入れがない。とやかく立ち騒いでゐるうちに、
『はや、敵の先鋒が、六條河原のあたりまで來てゐます』
との聲に、
『これまで』
と、義仲は、大きく喚いて、手勢わづか四、五百騎ばかりで、河原へ向つて行つた。
そこで散々に敗れた彼は、粟田口から近江へ落ちて行つた。瀬多の自軍と合流する考へであつた。――けれどもう自分の運命は分つてゐたものとみえて、蹴上の坂に立つた時、洛中を振りかへつて、
『幾月あれに居たらうな』
と、側の者にたづねた。いつになく餘り素直な義仲の顏いろだつたので、侍臣はふと涙を催したさうである。

一路通天

一

その日、院の御所はかたく門をとぢて、たゞ戰の成行を、戰を外にひそと見まもつてゐた。
すると門外に、どか〳〵と蹄の音が聞えたので、近侍の公卿たちは、
『さては、暴兵が？』
と、はや顏いろを失つて、法皇のお座近くにかたまりあひ、息をこらしてゐると、何やら外では高聲に呼ばはつてゐるので、耳をすましてゐると、
『これは、鎌倉殿の代官として、御院宣をかしこみ、洛中守護のため、宇治川より木曾勢を破つて、たゞ今馳せ參じた賴朝が舍弟源九郎義經です。――洛中諸所もはや平穩に復し、火災もこれなく、庶民もみな戶をひらき、町の往來も常のごとく見えますれば、何とぞ、御心やすら

かに思し召されまするやう――右の趣き、奏問の儀、願はしう存じまする』

すると。

誰とはなく、院に任へる者の下々にいたる迄が、一齊に、わあつといふ聲をあげた。闇の底へ陽の光がさしたやうな歡聲であつた。

法皇にも御眉をひらかれた。うろはしい御氣色のうちに、御座を立たれた。

院の御門はひらかれ、

『――通れ』

と、ゆるされた。

主從は六騎だつた。

義經以下、あわたゞしく、門外に下馬して、畏る〳〵通つてゆく。

中門の外の御車宿の前に、肅として、立ち竝んでゐた。

法皇は、その骨がらを御覽の上、一同の年齡や姓名、住國などを御下問になつて、

『みな、若いなう。どれも雄々しき面だましひ。侍もしげな益良夫ではあろ』

と、近側へ仰せになつた。

義經主從は、面目をほどこして退出した。そして、當座の兵舍まで戻つて來ると、辻々に立ちむらがつた民衆は、手をふり聲をあげて、彼を歡迎した。

その頃もう、瀨田、石山方面の捷報も、洛中に傳はつてゐた。

義仲の死が、確報されて來たのは、二十三日の晩であつた。粟津ヶ原で、今井兼平とわづか二騎となつて、あはれな討死をとげたと聞えた時は、何とはなく、戰捷の將士も、儚いものを思はせられた。

宇治川以來、こゝ三日二晩といふもの、義經以下の將士みな、殆ど一睡もしてゐなかつた。

――で、一夜の眠りは、何よりも大切な急務だつた。

ところが、二十五日の朝となると、誰の口からともなく、

『平軍が大擧して來ろ』

と云ひふらされた。

義經は、假の兵舍に一夜をやすんだが、起ぬけに、ぎくとした。

彼が、心ひそかに、惧れてゐたものは、味方の兵力に十數倍する彼の一擧に入洛を圖つて來ることだつた。

元より平家の大軍も、彼の武勇も恐れはしないが、義經は、その時機と、攻守の立場の逆になるのをかねてから惧れてゐたのである。

義經は、どこまでも、

『攻めるに利』

と、信念してゐた。

又それが、兵法の原則でもある。この攻勢が、取れない場合、あらゆる味方の不利と苦戰は避けられないものと考へてゐた。

しかし、周圍の政治的事情は、義經が逸るやうに、この際、迅速も果斷も必要としてゐないかのやうに、緩漫であつた。

二

義經は思ふ。

もし宇治川で手間どつて、こゝ三日も入洛が遲れてゐたら、平家の先鋒が自分等より先に都へはいつてゐたかも知れない。

その惧れは、今も決して解除されてゐなかつた。屋島から兵庫港に上陸した西軍は、一の谷に城廓をかまへて、虎視耽々たるものがある。

きのふ今日の、微妙な政治的のうごきは、そこまで移動して來た颱風の餘波ともいへる。

朝廷におかれては、連夜の御評議と洩れ聞えてゐるが、容易に、範頼と義經に對して、今後の方向をお明示にならなかつた。

今なほ、勅使を平家につかはして、何とか、兩軍の和議の方法を見出しては、と唱へる公卿たちすらあるらしかつた。

義經は、氣を揉んだ。

範頼に諮つてみても、範頼は煮えきらない性だし、何よりは、政治的な機微がわからない。

『鎌倉どのへ、早打を立て、そつと兵を上せ給はるやうに、わしから申し上げてあるから、た

とへ平家が襲せて來ようと、こゝ半月も固めて居さへすれば、そのうちに援軍が着くであらう』

などと云つてゐる。

何たる悠長さ！

義經は、猶さら、東軍の危さを思はずにゐられない。

『いや、今こそ、こゝ一日か二日が、源氏全體の興亡のわかれめだ。時代の峠だ』

と痛切に思ふ。

こんな急激な轉換期を見ながら、十日も半月も、悠々と、空しく待つてゐられようか。

いや、何事にも大事をとる筈の頼朝は、中央の政治的な雲行の如何によつては、

（――さう面倒ならば、一應軍を退いて、鎌倉へひきあげろ）

と、云つて來ない限りもない。

それやこれや、氣ばかり焦心つてゐるところへ、平軍が大擧入洛して來るといふ今夜のうはさである。

『さうだ！』

彼の座所へ、侍が、燭を運んで來た頃には、彼の面に、何か、悲壯な決意がすわつてゐた。

『――まだ鞍馬にあつた幼年の頃、夜ごと鞍馬谷へわしを誘ひ出して、わしの幼い魂へ、兵學を敎へこんでくれた父義朝の遺臣たちがよく云つてゐた。』

（――惡い世をよい世の中に革める。それが源氏の再興でなければなりません。けれど、新しい世をうち建てるには、必然、舊い勢力と、遮二無二戰つて、それを打破してゆく人が出なければできない。それは時の潮の眞つ先に立つ人だ。その人に降つた天の使命だ。打破しては創て、壞しては建て、その人は右顧左眄してはならない。一點の私もなければ民衆はついてゆく。さうしてたゞ、一名の者がほんとに國の人柱となる氣でずゝめば、それについてゆく民衆のあとに、自ら新しい世の相も組織もできてゆく。……が、これは賢い人にはできない。なぜならば、いづれにせよ、舊勢力からふるひ落される無數の人々から恨みをかふ。……故に、

英雄の末路はおよそ悲運ときまつたものです。けれどさういふ人も出なければ眞の建設はできない・・・・。あなたは、生涯の無事をお祈りなさるよりも、甘んじて、人のなし得ない天の使命をうける人とおなりなさい）

三

ふと、瞑目から醒めると、彼は不意に立あがつて、

『高綱はをらぬか』

と、妻戸口を出て、邊りへ呼んだ。

こゝの假の兵舍は、曾つて平家のなにがしが住んでゐた館とみえ、邸内はかなりな兵を入れるに足り、厩の棟も豐にとつてあつた。

『お召ですか』

高綱が馳けて來る。暗い地上にうづくまつて彼の姿を見あげながら云ふ。

『景季もをるか』

『をりまする』

『四、五名供をして來い』

『どちらへ』

『蒲殿の陣所まで』

義經は自身、厩の前まで歩いて行つて、馬を出させ、もう二條の方へ急いでゐた。景季、高綱たち五、六名が、後から徒歩で追つてゆく。

すると又一騎、追ひかけて來た。畠山重忠であつた。

『取急いで、お耳にまで』

と、重忠が駒を降りようとすると、

『下馬に及ばん。何か』

義經から駒を寄せた。

『うはさの實否を確めんものと、洛外遠くまで出向いて參りましたが、平軍入洛の事は、嘘報にござりまする。明日とも知れませぬが、こよひはまだ・・・・』

『さうか』
義經は、少し眉をひらいて、
『いづれにせよ、わしはこれから蒲殿へお目にかゝりに參る。そちは陣所へ歸つてよい』
別れて、又急いだ。
範冠者の本陣を義經が訪れると、範頼は、
『またか』
と、云はぬばかり、傍の梶原景時の顏を見た。
義經はもう通つて來た。
範頼に對しても、義經は義弟であるし、こんどの軍の編成でも範頼は總大將であり、彼は一方の指揮官でしかない。
當然、義經は、何をいふにも、さういふ禮と格から云はなければならなかつた。
『平家方の軍勢が、入洛の姿勢をもつて、こよひにも、動きかけてゐるといふ情報は、もうお聞き及びとぞんじますが』

義經が云ひかけると、
『風說にすぎない』
と、範頼はすぐ打消した。
『うはさは、嘘報ださうです。しかし、それで安心はなりません』
『備へはできてゐる』
『守備は不利です。ましてこの洛中にあつて、この小勢では』
『九郎殿には又、こゝを出て、攻勢に向へと、短氣をすゝめに見えられたか』
『これで三度、くどいとお思ひになりませうが』
と義經は、自分の主張を、耳の熱するまで說き出した。
けれど範頼は、
『院のお沙汰のないうちは』
と、彼と一致する容子もなかつた。そのうちに鎌倉殿の御返事もあらうなどと、依然として、悠長なものだつた。

その悠長にかまへてゐる事のいかに危險であるかを、義經は泣いて說破した。遂には、ことばも激越になつてくると、範賴は、

『九郎殿。ではお許は、院のお沙汰も待つに及ばぬ。鎌倉殿の御意向にもかゝはるなと云ふのか。この範賴に、强ひて、不逞な行動をとれとすゝめるのか』

と、云つた。

義經は、口をつぐんだ。

そして悄然と、二條から戻つて來る頃、夜は白みかけてゐた。

四

この日の朝。

義仲以下の首を、六條の河原に梟けるため、檢非違使等の役人は、まだ暗いうちから獄門の場所へ來て、指圖をしてゐた。

その人聲を振向きながら、義經の馬は、七條松並木のはうへ曲つた。すると、河原の下から、

『九郎樣。九郎樣つ』

と、遽に聲をあげて、追ひ慕つて來た男がある。

義經はふり向いて、

『やつ、吉次ではないか』

と、眼をみはつた。

吉次は、馬前に兩手をついて、

『お出ましと窺ひ知つて、昨夜からお歸りの途中を待つてゐました。何かと、その後の事ども、お耳に入れたう存じます。御陣所まで、お供仰せつけ下さいませ』

前後には、人がゐる。義經にも憚られた。

『むゝ。參るがよい』

その儘吉次をつれて、駒は急いだ。――と云つても、七條の陣所はもうそこに見えてゐた。人を拂つて、義經は、戻るとすぐ一室へ吉次を通した。吉次もけふは十分、義經の立場を察

してゐるらしく、相手にとつて無用らしい言は費やさないやうに慎んでゐた。

『こゝ數日が、大事な山、何かと御苦衷のほど、陰ながらお察しいたしてをりまする』

『そちは、以來、京都にゐたのか』

『いえ、ずつと、奥州へ歸つてをりましたが、去年、木曾殿の攻め入つた頃、ちやうど都へ上る用があつて、あの兵燹にめぐり會ひ、思はず足をとめてゐるうち、軍勢をひきゐて、あなた様にも、鎌倉を御發向と聞き、再度のお目どほりを樂しみに、お待ち申してゐたわけで』

と、吉次はいつも變らない自分の誠意をまづ相手に示してから、

『時に、ゆうべ蒲殿と御談合の末、平家の機先を制して、一の谷へ御進軍の議は、御意見一致なさいましたか』

と、訊ねた。

義經は、愕いて、

『どうしてそちは、左様な機密を知つてをるのか。わしと蒲殿とのはなしの内容は、極く少數な者しか知らぬはずだが』

と、疑つた。

吉次は、笑つて、

『鎌倉ではさうも參りませんが、この洛中の事ならどんな事でも、吉次の耳にはいらない事はありません。公卿堂上方のうごきでも、町々の出來事でも、誰かゞ吉次に聞かせてくれますから。……けれどゆうべは、さういふ手づるも無かつたので、實は今朝お目にかゝつて、お顏いろを拜してから、さては又も蒲殿との御意見が合はずにお歸りだな——と、かやうにてまへの胸のうちで、お際し申しあげた次第です』

『でも、わしの胸に今、さうした苦しみのある事は、どうして讀めたか』

『お公卿方の一部で、お噂してゐるのを聞きました』

『はて、誰が、義經の胸を左様に申してゐたか』

『九條兼實卿。また、院の御近侍たる朝方卿や親信卿なども……』

と、吉次は答へながらすり寄つて、聲をひそめた。

『今日中に、内々、その方面の方々へ、院宣即降の嘆願をなさいませ。あなたは餘りにも、政

治のうらを衝くすべを御存知なさ過ぎる。お手引は、吉次がいたします。まづ九條殿から先へお說きつけておしまひなさい』

五

ふしぎな男である。庶民層のなかに住みながら、上層の事情や政局のうごきなどにも實に詳しい。

（どうして知るのか）

と疑ふよりも、

（吉次如きが、聞き知るはずはない）

と、義經も初めは、頭から信を措かなかつたが、深く考へてみると、彼が、奥州の金商人として、過去の文化に携はつてゐた力は大きい。

多年の事である。その間に彼は自然、多くの貴紳から知遇を得、また特べつな交はりといふものもあつたに違ひない。

さう考へると、義經は又、

『嘘とも思へぬ』

と、彼の言に、耳をひかれた。

吉次としては嘘どころではない。彼は、義經に對してだけは、敬愛の心をもつて、奴僕の如く、身を粉にしても仕へる氣であつた。その誠意は、義經の多感な胸には、ありのまゝ映らずにゐなかつた。

『そちのことばに從つて、九條殿へお願ひに出てみよう』

遂に、義經が云ふと、

『いえ、いきなり九條殿へ、あなたがお訪ね遊ばしては、人目立ちませう。てまへにお仕せくだされば、よいやうに運びますが』

吉次は自信をもつて云ふ。

彼はその朝、そこを辭して、一日姿を見せなかつたが、夜に入ると、約束の時刻もたがへず迎へに來て、

『お身なりを變へ、お微行のつもりで、てまへに從いてお越しください』
と、迎へに來た。
そして何處ともなく、彼の駒を導いて行つた。
後に、人は種々に云ふ。
その晩、義經は、九條どのをこつそり訪れたのだとも、又、いやさる寺院の奥ふかくで、院のお側近く仕へる朝方卿や親信卿など反平家の、そして特に義經に好意をもつ一派の人々と會つてゐたのだとも、取沙汰は區々であつたが、誰も、實相は知るわけもなかつた。
その翌日、朝議は一變して平家追討となつた。紛論は排されて、最初の方針が、ふたゝび明示されたわけである。
義經の出發は早かつた。
餘り早いので、範頼は、
『院宣もかうむらぬうちに、私に兵をすゝめ、萬一、朝議の御決定にそむくやうになつたら、何とする心であつたか』

と、後に義經をなじつた。
しかしその範頼も、院宣をうけては、義經のあとを追つて、義經の軍に合流しなければならなかつた。
先鋒の義經は、丹波路をとつて亀岡から園部、篠山と通過し——篠山から西南の三草越えをさして急ぎに急いでゐた。
三草山をこえて、播磨境にはいり、印南野を南へ南へと下がつてゆくと、やがて、馬蹄の下に、一の谷がのぞかれる。
もちろんかういふ大迂回は、大軍ではできない。彼の腹心とその手勢だけである。範頼の本軍は、行動をべつにとつて、一の谷の東の城戸口、生田方面へ進んでゐた。
『一の谷へ總攻めは、二月三日ぞ。——三日を期して、總がかりに攻めつぶすのだ』
義經は、さう揚言した。
二日の道を一日に歩くほどな強行軍をつゞけながら、道々さう云つて、士卒を勵ました。
けれど、その三日には、總攻撃もなかつた。四日も、何事もなかつた。

『――四日は、清盛の忌日である。敵もさだめし佛事供養をしてあらうに』
と、思ひやつて猶豫したかの如くであつたが、五日になると又、
『けふは、惡日であるから』
などと云ひふらし、幾日かをわざと過して、一の谷に楯籠つてゐる平家方の全神經を、まづ不安と迷ひに疲らせた。

讒者

一

『梶原どのが見廻つておいでになりました』
義經は、さう聞いて、
『景時か』
と、いやな顏をした。
中軍の陣幕は、冬木立のなかに張りめぐらされてある。
その日も、何の行動も起さず、こゝの林に駐屯してゐたので、焚火の煙の立ちのぼる空に、鵯や鵶の啼くのも靜であつた。
『おつゝがもなくて、まづは祝着』
と、景時は、義經のすがたを見ると、皮肉な語氣でまづ云つた。頭を下げるにも、武骨といふよりは、ぞんざいなふうがあつた。
景時は、軍監として、こんどの西上には、總軍のうへに、重きをなしてゐた。
彼は、自分の口から常に、
(蒲殿も、九郎殿も、何分大將としてはお若いので、そちがよく奉行せよと、特に鎌倉殿から仰せつけられて參つた)
と、人にも語つてゐた。
そのことばの裏には、暗に、鎌倉殿の寵を誇つてゐるふうも見える。

さういつた人がらが、義經は好かなかつた。又、宇治、瀨田と分れて戰ふ前からも、景時とはよく評議のうへで意見の相違を來した。

義經は、義經の信念で押し通して來た。さうしなければ勝てない戰であつた。けれど景時は、

（九郎殿には、事々に、軍監たる此方へ楯をつく）

と、範頼などに向つては、その感情を口に出して云つた。

範頼と彼とはよく氣が合ふ。

いや、範頼なら景時の意のまゝにもなるからと云つたほうが正しい。

だから彼は、あたかも範頼の後見のやうに、多くは範頼の陣にゐた。そして、義經の陣地のほうは殆ど顧みなかつた。

先頃も義經が、一の谷にある平軍の攻勢に對して。

——一日も早く。

と、味方の積極的な行動をいそいで範頼を說いてゐた折も、いつも範頼のそばには、景時が、默つてついてゐた。

口に出して、反駁はしないが、範頼が何のかのと、言を左右にして、動かなつかつたのも、彼の優柔不斷ばかりでなく、その意志は、實は默つてゐる景時の表現だつた。

義經も察してゐた。

義經は又、その感情を巧につゝんでゐられない性情である。きらひな人間に對しては、きらひだといふ顏をする。わけて景時に向ふと濃厚にそれが出る。

（自分は、鎌倉殿の弟だ）

といふやうな自尊心から出る威張かたなどは誰にもした例のない義經であつたが、景時に對する時は、意識的にも、

（下臣）

と、いふ態度で見た。

それが、景時には、小癪に見えてならなかつた。

年齡、經歷、手腕、いろ〳〵な誇が彼にも募る。主君の義弟とはいへ、景時には、何の好感も義經にもてなかつた。人が義經を尊敬するのさへ不快だつた。

『御老臺。この山中まで、わざわざ大儀なことだの。何か、蒲殿のはうに、手違ひでも起つたか』

ことばの端にさへ、義經の云ふことは、氣にさはる。自分をさして、御老臺とよぶのは、義經の揶揄である。景時はもうそんな感情をゆり動かしながら膠もなく云ひ返した。

『蒲殿のはうには何の誤算もない。いぶかしいのはこの方面だ。あれほど急ぎながら、何で悠悠とこゝへ來て戰もせず日を過してをられるか。——蒲殿にはすでに糺附近の敵を破り、一の谷の東の城戸を目ざして、着々、進んでをられるのに』

二

義經は笑つて答へた。

『戰ふとは、たゞ敵に會へばよい事ではない。必勝の機をつかんで當らねばならぬ。又緩急は軍の呼吸で、急に利があれば急に變じ、緩をよしとすれば緩に從ふ——かうして馬を遊ばせ、兵を眠らせておくのも、兵法のひとつである』

軍監たる梶原景時は、元よりこんな軍事の初歩を義經から講義されようなどとは思ひも依らない。心外な顏いろを露骨に示して、

『あいや』

と、遮つた。

——自分が云はうとするのはそんな乳くさい論議ではない。實際問題である。すでに京を發足する時から、總攻擊は三日に決行すると揚言してゐる。故に、糺方面では、息もつかず合戰を開始してゐるのに、それと一致して行動すべきこゝの陣地が、幾日も空しく送つてゐるといふ法はなからう。

三日もすぎ、四日もすぎ、五日も經つて、けふはすでに六日ではないか。

『御所存がわからん。いつたい、戰はお見合せのつもりか。それとも、こゝ迄は來たが、これから先の難所に恐れをなして臆病かぜに襲はれ召されたか』

景時は、自分のことばは、鎌倉殿のおことばも同樣であるぞと云はぬばかり、かさにかゝつて叱咤した。

その威猛高を、義經は、わざと笑くぼで眺めて、
『總がかりを三日と云ひふらしたは、敵に攻勢を取らせぬ爲の策。四日は、亡き清盛入道の忌日とて、武士のなさけに、わざと過した。五日は暦のうへの惡日、これも避けたがよいと思ふて』
『ば、ばかな！』
景時は、唾するやうに、
『敵が佛事をいとなむ日まで遠慮してゐたら、攻め入る日などありはしまい。まして、清盛入道など、源氏にとつては、その墳墓をあばいても飽たらぬ仇敵だ』
『仇敵ながら、あの入道にも、人なみの涙はあつたればこそ、幼時この義經も、ふしぎに生命を助けられた。――また鎌倉殿とても、同じやうに、すでに無きはずの一命を、救はれたのではあるまいか』
『むむ。なるほど』
脈味いつぱいな頷き方をして、景時は横を向いて云つた。

『さういへば、御曹子の生みの母、常盤どのとやらも、入道のお世話になられたさうな。……無理もない』
義經の顏いろがさつと變つた。ちらとそれを見ると、景時は、座を起つて、
『いや、つまらぬ事のみつい申し上げた。餘事はさて措き、要するに、御進擊はいつの事か。東の城戸へ襲せるにも、手心を合せねばならぬが』
と、云ひ直した。
それに對して義經はしばし答へもしなかつた。彼の血は明らかにかき亂されてゐた。しかし水の澄むやうな落着きに歸ると、もとの笑くぼがその面にさびしげに殘つてゐた。
『あすの夜明までには』
『え。あすの夜明』。
『蒲殿と一の谷で會はう。見事それまでに、東の城戸を打破つて、お入りあるやう傳へてくれい』
景時は、無言で去つた。

林の外に待たせてある一隊の従者を従へ、ひどく急いで駒を飛ばして行つた。義經は、その後で、軍議をひらき、靜に、人々の意見を徵してゐた。

『一の谷へかゝるには、その前に、平資盛がかためてをる三草山の砦がある。――曉に襲はせたがよいか、夜討がよいか』

義經は、一同をながめて、そのいづれが上策かを、訊ねた。

三

夜討か。明方か。

この問題は、

（奇襲がよいか、正攻法に依るがよいか）

といふことになる。

義經はこの問題を、ひどく重大に扱つて、衆議にかけて、一同の意見をたゞしたが、考へる餘地もない事として、誰もみな、

『夜討』

『無論、夜討』

と、異口同音だつた。

世間の稱へには、平家方の總軍十萬餘騎、源氏は約三、四萬騎であらうといつてゐる。が、實戰は甚しく違ふ。

平軍は少くも二萬はあらう。けれど源軍は、宇治川以來の傷負や病兵をのぞくと、範頼、義經の兩方あはせても、三千騎に足らなかつた。その後、鎌倉からは、一兵も補充されてはをらない。

じかも義經がこれへ率ゐて來た兵は、初めから荷駄も後續部隊もなく、輕敏な性格を隊伍にそなへて來たので、多くを範頼の指揮下にのこし、およそ七百ばかりの兵しか持たなかつた。

それで敵の中核へと。

三草山の壘をふみ破つて、一擧に、一の谷へ衝き入らうといふのである。

寡と衆。また、天嶮に據つてゐる守備の強味。――正攻法で勝てないことは、常識でも知れ

てゐることであつた。

――それをなぜ？

土肥實平は、ひそかに怪んで、評議も終つて人なき後、そつと、義經にきいてみた。

『けふの事は、御評議までにも及ばぬ儀と思はれますのに、なほ、あのやうな分りきつた問題を、何故、物々しう一同の意見へおたゞしには成られましたか』

義經は、うなづいて、

『そちなどは、さうも思はう。しかし諸將には諸將の自負心がある。義經の所存は極つてゐるが、一義二義、わざと問題を出して、皆のものに、味はせ、また氣負ひ立たせて、一決を執るも、軍の故實ぞ』

と、敎へた。

實平は舌をまいて懼れた。

この御曹子は、いつたい、いつのまに、かう兵學の眞髓を究めてゐたのだらう。いや兵學を讀み習ふことは誰もするが、書物や口授から得たことを機に應じて用ひることはむづかしい。

實にむづかしい。かなり實戰を體驗してきた老將でもみな嘆じることである。

よほど感じたとみえて、彼はこの事を畠山重忠に、有のまゝ呟いた。すると重忠は、さもあらうと云はぬばかりに、

『われわれが、進んであの君の旗下に從いてきたのは、目ちがひでなかつたな』

と、おたがひに本望らしくほゝ笑みを見交した。

重忠も實平も、初めは範頼の指揮をうけてゐた將たちであつた。ふたり共、感じることがあつて、途中から義經の陣へ轉じたのである。常に、義經のはうは、難攻の敵に向ふので、志望者の少いのを幸に、進んで義經について來た者共であつた。

物見はたえず放つてゐるが、その日も、黄昏れ近くに、かなり深入りして來たのが、歸つて來て報告した。

『敵は、新三位中將資盛を大將として、およそ二千五、六百の兵を擁し、この三草山の向ふ側――西の麓にもの〳〵しく壘を築いてゐます。山路や澤に柵をゆひ廻し、守兵の配備など、きのふと變りは見えません』

夜に入ると、星影の下、義經たち七百の兵馬は、黑々と前面の山を越えて行つた。

斷崖

一

平家方でも怠らず物言を出してゐた。物見の報告を聞くたびに、

『さもあらう』

と、資盛以下、三草山の東麓にある將士は、義經の動かぬ樣子を肯定してゐた。

『義經ごとき黃口兒が、わづかな手勢をもつて、この搦手へかゝつて來たとて、何ができよう』

と、侮りきつてゐた。

そこへ山上から急雨のやうな夜襲だつた。闇のなかに狼狽をきはめた平軍は、われがちに潰

走し、ほとんど一矢も射なかつた程である。

『討ちもらすな』

『ひとりも城戸の內へ生かして歸すな』

急追して熄まない源氏の人々は口々にさう云ひ合つた。逃げゝを追つて、須磨の方へ馳け下り、そのまゝ敵の本據たる西の城戸へ、直に迫つてゆく氣であつた。

『長追ひすな。みな集れ。みな集つて一息いれよ』

義經は、逸る人々を呼びもどして、敵の捨て去つた砦の一ヶ所にまとまつた。

もう夜半に近い。あすは晴天であらう、星の空は冴え返つてゐる。時は二月初旬、こゝらの高地は海風がぶつけてくゝ、山風もふきおろす。すこし立つてゐると體がわなゝいてくるほど寒い。

『篝を焚け。篝を』

この數日は戒めてゐた焚火をゆるした。思ひきつた焰が數ヶ所から揚ゝ。將士の顏はみな赤赤と照らされた。

その間に義經は、重忠、實平などの重なる將たちと何ごとか手短かに議してゐた。

こゝに立つて義經が、改めて一同に云ふには、

『敵の逃げ足が早かつたのは、あながち敵が弱いためばかりとは思へぬ。こゝで戰ふよりは、一の谷の要害に據つて、存分、戰つたはうが利と考へたからであらう。――地形をみれば、こゝを降つて須磨に出で、西の城戸を攻めるしか攻口はないので、先に逃げた敵も一の谷の全軍も、御座んなれとばかり、手具脛ひいて、われ等の寄せるを待ちうけてゐるであらう』

彼は、さう前提してから、

『この小勢、この地形、味方に勝目のない事はいふ迄もない』

と、絶對に尋常では墜ちない敵の要害をまづ認め、その難攻の突破にあたつてゐるのだといふ覺悟を人々にも持たせた。

『――が、いつの世、いかなる場合でも、見た眼からして、易々と墜入りさうな砦はない。戰ばかりか、かういふ世に亡んでゆくあらゆるもの皆、一瞬の前までは、難攻不落と見えるものだ。……至難、不可能、それは物の象にとらはれた觀念に惑ひ、一心を賭して成らぬことはない。……ましてやわれ等の兵馬は單なる勝負の兵馬ではない。世に求められて時代の潮と共に、さきがけてゐる兵馬ぞ』

篝の火は、義經の横顔を燃やしてゐた。人のなし得ない役割をも甘んじてやりのける人となりなさい――鞍馬谷で打ちこまれた信念がその眸にはすわつてゐた。そこには、私心がない、小さな功名心とはちがふものである。何か、崇嚴な感じすら人々はうけた。

『實平』

『はつ』

『こゝよりは、全軍を御身の手にあづけるぞ。心して、西の城戸へ馳け向へ』

『はつ。……して』

『わしは、猶、山路を深くはいつて、鵯越から敵を眞下にのぞみ――』

云ひかけた時、うしろの兵のなかで、何か急に立ち騷ぐ聲がした。

ひと所にかためておいた七、八名の捕虜が、隙をうかがつて縛めを斷り、見張の兵を刺してやにはに逃げかけたのであつた。

『やつ、どこへ』

忽ち、追ひかぶさつて、逃げた捕虜もめつた斬にされたり、突き伏せられたりして、一瞬ではあつたが、血なまぐさい絶叫がそこに聞えた。

『斬るなつ』

義經はあわてゝ制した。しかし間にあはなかつた。無傷にまだ生きてゐた捕虜はひとりしかなかつた。

『大事にせよ。その者を、これへ曳いて來い』

やがて逞しい男が、彼の前へすゑられた。

その捕虜は、播磨安田の庄の下司多賀崇六といふ者だつた。

生國姓名だけ聞きとると、義經はすぐ諸將に向き直つて、

『では』

と、袂別の眼を與へた。

こゝで軍を二分し、そのあらましを土肥實平にゆだね、義經自身は少數の一部隊をひつさげて、鵯越の嶮へまはるなどといふ事は、平家方はもとよりの事、彼の帷幕者でさへ、誰も豫想してゐなかつた。

『――ちと、無謀だ』

と云ひたげな色が、そのせつな諸將の顏にうごいたが、義經の眉を仰ぐと、なぜか諫止することも、それを敢行するだけの成算があるのかないのか、細い事なども、訊ね出せない氣もちに打たれてしまつた。

それは義經の面に、すでに死を決してゐることが、明らかに見られたからであつた。

――成らねば死ぬまで。

鎌倉武士の心はそこへ飛躍すると華やかなこゝちになる。理はすてゝ、信念の究極へ、一氣に行つてしまふのである。

それまでは、各々理念にも惑つてみるが、智も働かしてみるが、死といふ點に到ると、もう

途中の妄智や煩雑な是非はもたない。

さはやかに、潔く、そして誰もみなかひ〴〵しくなる。笑ひ聲のうちに行動へかゝる。

『蒲殿が東門へ寄するも、あすの夜明を期してかゝらう。――それにおくるゝな。呼應して、明方までに、西の城戸へをめき寄せよ。義經も、播磨の海の彼方に、陽の昇りきらぬまに、かならず敵のまつたゞ中に馳け入つてをらうぞ』

別れにのぞんで馬上から彼はもう一度かう本軍を勵ました。

實平について須磨へ下つた本軍のはうはおよそ六百餘騎、――義經の手について、そこから猶も、山又山の道もない闇へ分け入つて行つた數は七、八十騎にすぎなかつた。

『道案内をせよ。一の谷のうしろまで出たら生命を助け、放してもくれよう』

挿房の多賀菅六を馬の先に歩かせて、義經主從は、遮二無二馬をすゝめた。

『獸のかよはぬ山はあるまい。獸の通ふ山ならば、馬とてもすゝめぬわけはない』

義經は、うしろに續く人々へ、さう云つた。笑ひ聲が答へてくる。誰か、とたんに落馬したらしい。また笑ふ。

密林の澤をこえると、徒歩でも困難な石山の嶮しい胸に行きあたる。星明りにも光るほど馬は汗にぬれてゐた。時折、鞍を下りて駒を休ませた。

『もう、敵地の中』

誰も、笑はなくなつた。

また進む。いよいよ道はかすかだ。遅れる者、姿の見えない者などできてくる。

『あすは屍か、生身か』

さすがの武者ばらも、名殘りのやうに時々星を見た。しかし義經は、死中に活路の希望も持つた。死中の道を避けて、必勝の道はないと信じてゐた。

三

『はて。迷つたかな』

そのうちに、人々は、駒をとめて呟き合つた。

『方角が違ふ氣がするが』

『さうだ、いくら行つても、山深くなるばかり』
畠山重忠は、道案内の多賀菅六へ向つて糺した。
『菅六とやら、この方角に間違ひないか』
『はい。たぶん、間違ひは、ないつもりで御座いますが』
今になつて、捕虜の菅六はあいまいな口吻で、おど〳〵答へた。
『さては故意に、われ等を道に迷はせたな』
三浦義連は、菅六のすぐ側にゐたので、馬上から襟がみをつかんで引寄せ、縊め殺しかねない顔をした。
『持て義連。悪意ではあるまい。生命惜しさに、道案内には立つたが、常には人も通はぬ難所、その男とて、詳しい道はわからぬのがほんとだらう。——誰ぞ、身軽に馳けあるいて、この附近に樵夫の小屋などないか、炭焼、猟師の住居でもないか、手わけして、探してみよ』
人數は少い。義經のさういひつける聲は一隊の端まで聞えた。
急ち、馬をつないでわらわらと幾人かが馳け去つてゆく、その間を、義經も鞍から降りて休

んでゐた。
すると程なく、熊谷直實の子息の小二郎直家が、まるで猿か山男のやうなひとりの若者を引つ張つて來た。
若者はそこまで來ると、恐れたものか、どうしても歩かないので、小二郎は腕づくで、義經の前へひきすゑた。
『あの山のうしろの澤に、小屋の灯が見えました故、近づいてみると、年老いた獵師とこの倅がをりましたので、親を承知させて借受けて參りました。このあたりの山の事なら知らない事はない息子だと親は自慢でござりました』
直家が云ふと、大勢のなかに引すゑられたその若者は、眼が眩みでもするやうに、ぺたと、顏を地につけたまゝ、身を縮めてゐた。
『……ホ。左樣か』
と義經は、やさしく、
『名は、何といふ』

まづ訊ねた。
若者はかぶりを振つた。名はないのかと訊くと、頭をたてに振つてうなづく。
まはりの人々が笑ふので、若者はよけいに固くなるばかりだつた。——年はと訊けば、十七と答へる。
十七にもなつて、名のない者はあるまい。親たちは何と呼ぶかと訊ねると、せがれとしか呼んだことはないといふ。
『では、世間の人は』
と、訊くと、自分の小屋のある邊が、鷲尾といふ地名なので、鷲尾とよばれてゐると、漸く心も落着いたか、すらすらと答へ出した。
『さうか』
最前からの彼の容子に、義經は始終ほゝ笑まれた。愛らしくさへ思はれた。武士になろかときけば率直に、なりたいと云ふ。そして初めて、强烈な眸をして義經のすがたを仰ぎ、幾たびも頭を下げた。

『姓は、鷲尾でよからう。時は春、わが一字を添へて、經春と名のれ鷲尾の經春と』
義經のことばに、若者は、身のおき場も知らぬばかりな體だつた。人々から、
『鵯越のうへに出る道を知つてをるか』
と、案内を促されると、彼は勇躍して、一同の先に立ち、
『さう遠くはない』
と、無造作に歩きだした。

四

急に、大地は眼のまへで斷れてゐる。暗い空に岩角の線がうつすら蜿つてゐる。そこから覗けば絶壁であらうことは疑ふまでもない。
『一の谷』
『一の谷だ』
口々に思はず云ふ。その面へふきつける風には潮の香がいつぱいにふくんでゐた。

人よりも勘のするどい馬は、早、前肢を突つぱつて、後ずさりした。
『崖へのぞんで、岩を崩すな。馬を締めて、嘶かすな』
義經は、戒めながら全軍を後の木の間にかためた。
そして四、五騎の者だけで、能ふかぎり斷崖の際の近くまで馬を歩ませてみた。
『お、お』
のぞき下ろすと、敵の本據はあまりにも眼に近いのではつとした。眼もくらむほど深さは深いが、平軍の中樞と、自分等との距離としては、最少限度の近さである。
しかも平家方では、夜來の情勢に緊張して、寢もやらず諸所に篝を焚き明かしてゐる。陣所陣所の假屋、はためく幕、城戸、逆茂木など、美しいばかり明滅して見える。
そのあたりを一條、白い波の線が走つてゐる。沖にも點々と、兵船の篝が數へられた。耳をすますと、風のまに、波の音、櫓の音、人聲とおぼしいものすら微かに聞えてくる。
『どうしてこゝを降るか』
重忠も實平も、また日頃、我武者をもつて任じる三浦義連も――凝然と下を見てゐるだけだ

つた。
義經の馬の口輪をしかと握つてゐた佐藤繼信と忠信の兄弟も、
『これは』
と五、六歩駒をうしろへひいて、
『如何召さるお心？』
と、主の面を仰いだ。
義經は、しきりと唇をかんでゐた。彼もかくまで嶮しい所と考へてゐなかつたかもしれない。
元より彼は、一の谷のうしろの嶮峻は覺悟してゐた。そこへ向ふ非常識も辨へてゐた。けれど彼は、敢て、常識を無視して、非常識へ突進してきた。
平常の常識の程度は、敵にもある常識である。
人の眼と智がみな、
不可能！
と、極めてゐるなかに可能を見出すことこそ、非常な時の常識といふものではあるまいか。

『……』
義經はしきりと未だ唇をかんでゐる。ともすれば、平常の常識から不可能としてしまひ易い自己の觀念に對して、強く唇を嚙むのであつた。
『鷲尾。鷲尾』
案内して來た例の若者をかへりみて訊ねた。
『この山を鹿は通はぬか』
『鹿？……。あゝ鹿ですか。冬近くなると丹波の鹿が、よく一の谷へ越えます。春暖かになると又、一の谷から丹波へ歸つて行くので』
『さうか。鹿の攀ぢ登れる所なら、馬とて驅け落せぬことはあるまい』
『いえ、鹿なればこそで、馬や人では』
鷲尾の若者さへ危んでゐるのに、義經は耳にもかけない眉して云つた。
『忠信、繼信。空馬を二頭これへ曳いて來い』

『はつ。馬をですか』

――心得て、繼信、忠信の兄弟は、味方の七、八十騎がひそんでゐる後方の林へ駈けて行つた。

そのあひだ、義經は鞍のうへに靜な姿を見せてゐた。今は、もう何も雜念のない姿かに見える。海も空も一色のまゝ未だ明けない宇宙にむかつて、駒を佇ませてゐた。

『九郎樣』

誰か、馬のわきに、ひざまづいたやうである。義經は、地を見て、

『まだ居つたか』

と、不興氣に云つた。

『へい』

吉次は、頭を下げ直した。京都から强つて軍に從いて來て、三草山のてまへでも、こゝから

戻れと、嚴しく叱られたが、猶別れかねて、遂にこゝ迄、慕つて來た彼であつた。

『……へい。もうこゝで、歸らせていたゞきまする。商人の中では、隨一の大膽者といはれた私ですが、なるほど、戰の場所とは、かうしたものか、すさまじさに膽もちゞみました。……てまへにはもう殘念ながら、これから先のお供はできかねまする』

『歸るがいゝ。氣をつけて。……さうだ鷲尾の若者と一しよに戻れ』

『ありがたう存じます。……が、後へもどるてまへの身よりも、あなた樣こそ、どうか、どうか、御武運よく、戰ひぬいて、又お目にかゝれますやう、吉次は祈つてをりまする』

『何をいふ』

聲なく笑つて、

『吉次、あてにもならぬ事、祈らぬがましぞ。祈れば後がくやまれる』

『くやまれませう。もしもの事があつた場合は。……もうさうなつたら、吉次は望みもございません。僧門にでもはいります』

『鞍馬以來、そちにはずゐぶん世話をやかせたな。わが儘をしたな。禮をいはう。吉次、そち

にも一つの恩はあろ』
『もつたいない』
吉次が、あわてゝ手をふりながら、馬上を仰いだ時である。義經の横顔に、燦と、紅い微光が映した。
東の天が一變してゐた。水と空とは父母のやうに、眞つ赤な日輪を孕んでゐた。
義經の眼も心も、しばしその崇嚴な光に浴かされてゐた。吉次も凝視してゐた。うしろの木木の蔭を立出た將士も、面を焦かれながら肅として見まもつてゐた。
『あ吉次。まだゐたか』
『はいつ』
『よかつた。そちには、そちならでは出來ぬ大役の頼みがあつた』
『な、なんでございますか』
『――それも、この斷崖の下へ行きつく迄、義經のいのちが無事であつたらば――だが』
『とちあれ、仰せ下さい。伺つておきませう』

六

『灘波あたりに、そちの手持の船は今、どれほどあるか』
『奥州船は、いかほども參つてをりませぬが』
『ともあれ、灘波へ急ぎ、そちの力で集めらるゝだけの船を、淀の口、渡邊あたりへ寄せおいてくれ。――船底には悉皆、兵糧をつみ入れ、世上には、四國へ渡る商船といひふらして』
『船數は』
『多いほどよい。いかに多くても餘るほどは寄るまい。源氏の兵馬がみな乘るには』
『わかりました』
吉次は、辭儀をして起つた。もう義經の胸にできてゐる次の作戰が彼にもおぼろながら讀めた。
『たのむぞ。はやく行け』
『では――』

と、吉次は、萬一これが最期の別れとなるかも知れないと思ふので、猶、すぐには立去りもせず、すこし後へ退がると、待かねてゐた佐藤兄弟が、

『馬を引ました。これでよろしうございませうか』

二頭の口輪をとつて、その裸馬を、義經の左右へ寄せた。

義經は打うなづいて、

『その二頭を、絶壁の眞下へ、落してみよ』

と、命じた。

織信も忠信も、彼の心をはかりかねたやうに、念を押した。

『落せとは』

『追ひ落すのだ』

『はつ』

ふたりは、斷崖の際へ、馬の首を引つ張つた。しかしやゝ近づくと、馬は恐れてそれ以上は動かなかつた。

『誰ぞ、駒のしりを打て』

あわてて兄弟が云ふと、おうと、他の者が馬のうしろへ廻つて、

『打つぞ』

鞭を鳴らした。

とたんに、織信も忠信も、馬の口から手を離した。あやふく、宙へたてがみを振り立てた馬諸共、人も一しよに落ち込んだかと見えた。

二頭の裸馬は、斷崖からまつ逆さまに落て行つた。下まで、深さは何百尺が眼づもりもつかない。

『……』

義經以下、大勢の顏が、息もせず、その一瞬をのぞき下ろしてゐた。白つぽい小石まじりの土砂に、所々、大きな岩石が露出してゐる。土層の段ごとに、雜草や小松がまばらに生ひ、そしてその土層は、下の地盤から五、六段上に近づいて又、七、八段の横縞を見せてゐる。

元よりその一つの縞にも、馬は立ちどまらなかつた。ひと段ごとに、土砂を蹴くづし、下ま

で勢ひよく落ちて、一頭は脚を折つたらしくそのまゝ斃れ、一頭は這ひ起ると身ぶるひして、そこらの草を喰つてゐた。

この試みからみると、危險率はちやうど相半してゐる。

『見たか、各々』

義經は、早、斷崖にのぞんで、駒を立てならべた人々をかへりみながら云つた。

『馬と人一體に、心して駈け落せば、七十の兵のうち、三十五騎は生きのこらうぞ。――まづ義經が先駈けして見せ申さん。義經が馬の立てやうを見習ひ候へ』

彼は、云ひ終ると、すぐ自身の馬の後脚を折敷かせ、手綱を搔くり、激流へ筏を下ろしてゆくやうに、ざつと絶壁を落して行つた。

『おうつ』

『――おうつッ』

『それつ』

おくれじと、劣らじと、鎌倉武士のたましひは、白熱して搏ち合つた。そこの絶壁いちめんを砂けむりにして、山くづれとばかり、下の磯を埋めた。すぐ躍り立つもあり、そのまゝ起たない馬、起たない犧牲者もすでにあつた。

獨愁

一

彼のやしきは新に六條室町にさだめられた。義經が一部の手勢をひいて、そこへ凱旋したのは九日だつた。

市中は、まるで祭のやうな騷ぎだつた。その中で、平家のために、

『變れば變るもの』

と、泣いてゐる女もあるし、

『いよいよ時代は革まつた』

と、興奮してゐる若者もあり、念佛をとなへて、捕虜のすがたや首桶に眼をそむけ尼もある。

一の谷で討たれた聞えた平家の將は、重なる人々だけでも夥しい數にのぼつた。

平敦盛、忠盛、通盛、經俊、經正、知章――など十指を折つても折りきれない。

首は十三日の頃、巷をわたして、六條河原に梟けられた。

奏問の儀もすみ、鎌倉へはもちろん次々に早打で報告もした。居ながらに、合戰の狀況と處理のよく解るやう、義經は特に兄頼朝へ心をつかつた。いや鎌倉どのの代官として遺漏のないやう萬全を盡した。

――が、その兄からは、

『よくいたした』

といふ一片の返書もない。

範頼のはうへは、それが來てゐるらしと聞くが、義經には沙汰もなかつた。しかし義經は、兄から恩賞の沙汰を聞かうなどと期待してゐるのではない。彼の歸京は、朝廷、鎌倉への報告と共に、平家方の打首や擒人の處分、その他の軍務を果すためで、心は、一日はもはやく再び西下して、今のうちに、平家の全勢力を掃滅しておかなければ後日の大患と考へてゐたのである。

彼の惧れてゐるのは、瀬戸内海を中心とする平家の水軍の力だつた。清盛が生前に宋船との交易をはかるため、各地に扶植しておいた造船力とか水路の開拓とかいふ遺業が、今、入道の子孫の沒落にあたつて大きくものを云つて、内海から九州まで、制海權を擁してゐる。

駿馬の快足をほこつて、野戰や山岳戰には自信のある源軍も、水上の戰には、ほとんど訓練もないし兵船も持たない。

『いかにして、屋島を？』

彼は、一の谷を陷す前から、平家の水軍と、その本營を繞る地形を察して、人知れず苦念してゐた。

一の谷から潰走した大半の敵は、彼の豫想どほり、多くは船で水路を逃げのび、屋島附近へ集合してゐる。

しかも、九州をひかへ、中國に接し、日一日、その勢力は増強するに極つてゐた。

鵯越の岩頭から眼の下の敵へかけ下るまへに、

――もし生あらば。

と、彼が次の作戰のため、吉次にいひつけておいた船の準備も、あの男の事である、もう手配もついて難波の淀の口に、舳をならべて待ぬいてゐるであらう。

それやこれ。

彼の胸はせはしかつたが、鎌倉の指令は、いつかう急でなく、朝臣のうちには又、政治的なうごきが再燃しだした。

源氏に生虜られて都へ歸つた平重衡に手紙を書かせて、屋島の宗盛の許へ、

『源氏と和議を講ぜよ』

と、云ひ送つてあるといふやうなうはさも聞えた。

とかうするうち、半年の餘、むなしく過ぎてしまつた。義經は、むなしい日々をどうする事もできなかつた。

二

『――近ごろ心外に存じまする』

と、拳を膝において、或る折、遂に、彼の前で云つた者がある。

佐藤繼信、忠信の兄弟だつた。

義經は、面も靜かに、

『心外とは、何を』

と、さり氣なく訊ねた。

繼信は、いつになく激して、その義經の面を見つめながら、

『おつくろひ遊ばしますな。おそらく、われ等以上、殿のお胸には、御無念が抑へられておありでせう』

『はての……。なぜ？』

『くちをしう御座います』

兄弟とも、兩手と共に、それへ面を伏せてしまつた。

『わからぬ。何の事やら』

『・・・鎌倉殿のお仕打です。疾くに、鎌倉殿の御推擧によつて、あの無能な蒲殿さへ、參河守に任官され從五位下に叙せられてゐるではございませんか』

『よいではないか。――それが何で心外か』

『――にも關はらず殿へ對しては、其後も何のお沙汰もないさうです。露骨な御偏頗――無慈悲なお仕打』

『何をいふ。義經は、恩賞をのぞんで戰つたものと、そち達まで思ふか』

『いや。・・・決して左樣な心根とはぞんじません。しかし事實上、京都御守護のお役を奉じながら、何の官職もなくては、朝廷の御用が勤まりません。無位無官では、いかに忠勤をおはげみ遊ばさうとしても』

『そんな事はない。鎌倉殿の代官とし、京都にある身故、この三月には、高野の僧衆と寂樂寺との紛爭を裁き、また五月には、祇園神社の訴訟を聽き、そのほか都下の秩序も、禁門のお護

りも、まづ落度なく勤めてゐる』

『それは人々が殿へ歸服を示してゐるからで、その實績に對しても、鎌倉殿から何らかのおことばがあつて然るべきでせう。ましてや宇治川以來、一の谷のあのやうに迅く陷ちた功績は、いつたい誰にあると思し召してをらるゝのか。おこゝろの程が解せませぬ』

、云ふなと叱つても、二人は云ひ熄まないのである。又、佐藤兄弟が無念としてゐる事は、この六條の邸に住む義經の麾下が今、擧つて不滿としてゐることだつた。

で、義經の直臣たちは、先ごろ諮り合つて、鎌倉殿へ嘆願書をさし出してゐた。義經に對して何とぞ一日もはやく官途の御推擧を給はるやうにと。

ところが、その願ひはかへりみられず、嘆願書は問注所から突つ返され、かへつて義經に對して、賴朝の不興と疑ひは深まつてゐるといふ噂さへ鎌倉から聞いたのである。

嘆願書に名を連ねた面々は、自分らの盲動が、豫期に反して、主君をより以上の苦境に立たせたといふ點から、

『申しわけない』

と、悲涙を押ぬぐつて、

『――この上はどうする』

といふ策もなかつたが、佐藤兄弟のみは、かねて奥州を去る折、藤原秀衡から云ひふくめられてゐた事もあるので、今は都にとゞまつて何のかひがありませう、はや、御加勢の事は斷念して、いさぎよく此地を去り、ふたゝび奥州へさしてお歸りあれと――さう義經のために、眞心をもつて、諫めに出たのであつた。

――と、義經は、ふたりの諫言を、瞑目して聞いてゐたが、やがて、

『義經は、死しても歸らぬ。そち達、故郷が戀しくなつたのなら、二人だけで歸れ。けふかぎり暇をくれる』

と、きつぱり云つた。

三

平家退去の時、大半、燒拂はれもしたが、京都の町や、途ゆく人の粧ひは、わづかなまに著

るしく變つて來てゐる。

べつに、法令をもつて、

（平家風は相ならぬ）

と、律したわけではないが、一頃のこれ見よがしな華奢や音階や色調は去つて、どことなく實質を內容にもたうとする風が見えだして來た。

――と云つても、庶民の心には今、言はず語らず、次の時勢にかけてゐる希望がある。大きな行くてを望んで理想する民衆は、必然、明るい色を好んだ。高い足なみに合ふ音樂を欲した。地味よりも派手を求めた。

だが。

派手も明るさも、平家の人々が繼つた浮薄とはちがふ。纖弱ではない。いたづらに贅でもない。

剛健な明るさである。われこそ奉公の道にかけては人に負れじとする派手。――しかも無駄なく、毅然と、清潔を主とした姿をもつた、燒跡の新しい町を行く武士を見ると、

（鎌倉風よ）

と、人々はさゝやいた。

多くは義經の部下だつた。その人々から一つの風が興つたともいへる。いつか庶民の風俗も、それに倣ふ。忽ち、風は風を興して新しい世粧となつた。

『こゝだな、弟』

『むゝ。この寺』

六條坊門から北山のほうへ曲がつて、もう農家しか見えない邊りに、一叢の木立と山門が見える。

佐藤兄弟は、そこを通つて、寺僧へ何かいふと、僧は顏見知りと見え、すぐ二人を案内して奥の客室へ導いた。

『おう、これは』

腹這ひになつて、頰杖つきながら、蟻を眺めてゐた退屈さうな男が居た。あわてゝ起直つて禮儀をする。

『どうなさいました。おふたり共、いつになくお元氣がないが』

寺の食客は、奥州の吉次であつた。白拍子の家で幾月もかうしてゐた彼の都ぐらしも一時代前となつた。洛中大火の時、翠蛾、潮音の家も燒けて、どうしたか、彼の姉妹の消息もそれきり知れなかつた。

『いや吉次。實は、かう兩名とも、御主君から御勘當をうけてしまつたのだ』

『ほ。お暇を出されました』

『奥州へ歸るがよいと、きつい御不興をうけ、お詫いたしたが、お聞入もない。……で、悄々、そちに相談に來たわけだが』

『いけません』

吉次は、手を振つた。

『この吉次も、一の谷でお別れしたきり、ずつと、お目にかゝらずにゐる所です。灘波の淀口に、たくさんの船を借あつめ、今か今かと、御出軍を待つてゐたが、たうとうお沙汰なしで、えらい手違ひをやつてしまうた。……しかし、その私が、お目にかゝりに參上したら、お辛い

に相違ない。……手前も亦、あの君の、御無念なお顏を見てもしかたがない。そのうちには、風のふき廻しも變るだらう――さう氣永に考へて、けふも半日、蟻の爭ひを眺めてゐたところです。――せつかくですが、お取なしの事なら、どなたか、餘人にお賴みください。手前はまだ當分、源九郎樣へお目通りしたくございません』

『さう出ばなを取られては』

と、繼信と忠信は、當惑さうに顏を見あはせて、

『でもまあ、はなしだけでも聞いてくれい』

『おはなしだけなら伺つてみませう。……が、たいがい判つてゐます、きつとあなた方お兄弟も、むきになつて、何か、お諫め言を仰つしやつたのぢやございませんか』

『さうだ。――だが、申し上げたが無理だらうか。わし達は、殘念でたまらぬのだ。吉次、そちは何う思ふ。鎌倉殿のお仕打を』

義經を思ふ餘りに、ふたりの抱いてゐる不平は、元より吉次も抱いてゐる不平だつた。

從つて、繼信と忠信が、泣かぬばかり憤慨して云ふところは、いちいち同感であつた。共に、貰ひ泣してしまはぬばかりその可憐しい氣もちは解る。

だが、吉次は、

『もう、やめませう』

と、顏を振つた。

今は、何も語りたくない、又聞きたくもないと、興のない體なのである。

『それよりは、御勸當をうけたあなた方は、これから何う召さるお心か。――故郷の奥州へお立歸りなさいますか』

と、訊ねた。

『なんでこの儘、歸られるものか。秀衡樣に對しても』

弟の忠信は、兄以上、感情にさし迫つてゐた。

このうへは關東へ下つて、問注所の人々をうごかすか、鎌倉殿へ直訴してもとまでの決心を

仄めかした。

『いけません。むだですよ』

吉次は又、手を振つた。

『なぜ鎌倉殿が、あのやうに、源九郎様に無情いか。原因をよく考へてごらんなさい。――手前の觀るところ、お二人の御性質は水と火です。元々合はないものでした。鎌倉殿は單に九郎様を打ッてつけな使ひ途に利用してゐるに過ぎません』

『それでいゝものか。上に立つお方が、そのやうな、利己主義の範を示して』

『覇業のためにはぜひもないと――鎌倉殿御自身に心のうちで冷やかにいひわけしていらつしやいませう』

『わし達の心情では、ゆるせない冷酷だ。世人一般に、骨肉の愛といふものを疑はせよう。血と血とのつながりに醸される美はしい愛情を、人の上に立たれる御方からして認めぬやうな御行爲をなされたら、世上人心に、どういふ影響を及ぼすか、恐ろしいことだ』

『いや、鎌倉殿とて、まるで血の氣のないわけでもございますまい。人しれず、そこは惱んで

をられませう。……が、さうした心の機微へつけ入つて、ある事、ない事、努めて御兄弟が離反してゆくやうに、耳こすりする讒者もゐるから薪に油です』

『讒者。……ムム、梶原景時の類か。とはいへ、あれほど御聰明な鎌倉殿が、小人輩の讒言などに動かされてとは考へられぬ』

『聰明なお方に似あはず、猜疑はおふかいと聞いてゐます。偉きな人物にも、小さい愚は誰も持つてゐるものだ』

『――とあれば猶更、死を賭しても、わし達は、鎌倉殿へ直接お訴へしてみるのが、殘されたた〻一つの道ではあるまいか』

『それも、讒者に悪用されるだけでせう。鎌倉殿のお憎しみは、九郎様へ深まるとも、薄らぐはずはありません。――それ程、あなた方が、御主君を思ふならば』

と、吉次の眼はそこで急に燃えつきさうに二人へ迫つて來た。彼は、からだ迄のり出して、聲をひそめ、思ひ入れをしてから云つた。

『どうです、いつその事、源九郎様を立てて鎌倉殿の手から離れるやうに謀つては。――次の

時代に鎌倉殿をいたゞくがよいか、義經様をいたゞく方が世の爲によいか。……そこですよ、手前はひとり考へてゐるので』

『では、鎌倉殿へ弓をひけとそちは、云ふのか』

『ま。さういふわけです』

平然と、吉次は答へた。

五

吉次の謀叛氣にも組せない。

さうかといつて、鎌倉殿へ直訴のことも、効果は疑はれる。

佐藤兄弟は、迷つた。

奥州へ歸る氣は元よりない。吉次のゐる寺に、ふたりもつい幾月かをなす術もなく暮してゐた。

――が、毎日巷へ出て、主君義經の身邊や源氏の動靜は心にかけて聞きさぐつてゐた。

政治的に、軍事的に義經をめぐつて、事情はよほど變つてきた。

秋、十月の半ごろ。

六條室町の義經のやしきから美々しい八葉の車がひき出された。

衛府三名、供侍二十騎が、それに扈從して行つた。

『判官どのが出られる』

『大夫判官様が、初の御參内ぢやさうな』

辻々に人が馳け出て、車のうちなる人を見ようとした。

八葉の車のうちには、平和な裝ひをした義經が駕つてゐた。その折、目擊した人々のうはさとして書かれた物にも、

容貌優雅にして、進退のやさしさ、義仲などの類にはあらず。

ことのほか京馴れてこそ見えたれ

と、あるほど、それは端麗でもの靜な人がらと群衆の眼にも映つた。

鎌倉殿の、複雜ないきさつなどは、群衆のあたまにはない。たゞ當然なこととして見送つて

ゐたのである。

『だが、これは、一體、どうした事？』

と、佐藤繼信と忠信は、ひそかに六條のやしきに殘つた舊友に訊ねてみると、鎌倉と義經とのあひだは、以前にもまして良くないが、特に、後白河法皇の優渥な思召から、院旨を以て、敍位官職を賜はつたものと聞かされた。

いづれその前から、法皇のお耳にも入つてゐたにちがひない。義經の人間、義經の功勞に對して、先に、檢非違使へ補任との恩命があつたが、義經は、

（兄のゆるしも待たずには）

と、固辭して、たゞ恩命のありがたさに涙してゐた。

が、たつての院旨を、そんな私の理由で、再三拜辭することの畏多さに、遂に、任官の由を、鎌倉へ報じると、賴朝は、

（恐らく、義經が內々の所望によつて、宣下せられたのであらう。義經が、この賴朝を疎略にいたす事、この度ばかりではない）

と、ひどく不興であつたといふ。

そしてその返辭には、

（賴朝の代官として、平家追討使たるの役目は、今日以後、その任を解く）

と、いふ沙汰だつた。

義經は、兄の心を知るに苦んだ。そして、その苦しみを、兄の怒を解くはうへ向けようと心をくだいた。

さういふ心境のまゝに、この十月、かさねて今度の恩命に接したのであつた。——從五位下、太夫判官とよばれることゝなり、同時に、院內ならびに參殿をもさし許されたのである。

八葉の車は今日、お禮のため、贖の殿上へと、その人を駕せて行つたのである。

『さういへば、あのお顏に、お欣しさうな影もなかつた。秋日の下に、ぽつねんと一本咲いてゐる白菊のやうに淋しげであつた。——獨り、あのお胸に、どんなお氣もちを抱いて』

繼信と忠信は、さう語りあつて、斷腸の思ひがした。

法皇の恩寵と、鎌倉との板ばさみになつて、この吉い日を、歡ぶにも歡べない立場が、宇治

川や一の谷の働きに對する骨肉の人の答へとは。
『――忠信』
『はい』
『わしたち兄弟は、さうあるまいぞ。たとへ行末、どんな事があらうとも』
『あたりまへです！』
吉次のゐる寺へと、その日も歸つてゆく途々、兄弟は改まつて、兄弟のあひだで交した例しのないことを云ひあつた。

同根相剋

一

――轉じて、屋島を中心に、瀬戸内海を抱く國々の動靜を見るに、一の谷敗退後の平家は、

まつたく勢をもり返して、その陣容からでは、
『いつたい戰は、源氏が勝つたのか、平家が勝つてゐるのか』
と、疑はれるやうな形を呈してゐた。
範頼は、いちど鎌倉へ歸つてゐたが、頼朝の命で八月鎌倉を立ち、
『義經なくとも』
と、中國から九州へまで、源軍の大將として下つたが、むしろ彼を、手に唾して待つてゐた平家方の謀將知盛のために翻弄されて、その年の末頃には、
『船がありません。兵糧もつゞきかねます。兵力も不足で――』
と、鎌倉へあてゝ、頻々と、窮狀ばかり訴へてくるといふ始末。
義經にはきびしい頼朝も、範頼には甘すぎるほど寛大だつた。自身で假名消息こま〴〵認めて、誡めたり、勵ましたり、泣く子をあやすやうに督戰し、そのための評議も度々ひらいて、東國の船をあつめ、兵糧をつみ込ませ、範頼の助けに送らうと用意してゐた。
正月となる。文治元年。

周防にゐた範頼は、平家の壓力に居たゝまれず、赤間ヶ關へ移動した。
こゝを基地として、平家を攻めるつもりだつたが、こゝでも兵船が手に入らない。又、糧食もつゞかない。
『何たる拙！』
部下さへ感じ出した。範頼の作戰は根本から過つてゐた。といふよりも無方針に近い。
屋島を本據に、平家は、瀬戸內海の制海權を占めてゐる。それに對して、いたづらに沿岸各地をさまよひ、敵の誘導戰術にのつて、九州まで南下してしまひ、氣がついた時は、京都との聯絡を、うしろの中國路で敵に見事遮斷されてゐたのである。
『無能』
といふ衆評が、誰いふとなく源軍のあひだに漲つた。
『故郷がこひしい』
大びらに云ふ者がある。和田義盛すら、鎌倉へ歸らうとした。兵の脫軍が續出する。
辛くも、そんな狀態の折、豐後へわたる八十餘艘の兵船と、一時しのぎの糧米が手に入つ

た。——だが、乘りきれない者のうちには、身に着けてゐた甲冑を賣拂つて、小舟を買入れ、それへ部下の兵と共に乘つて、後を追つた將さへあつた。
鎌倉でもさすがに見てゐられなくなつた。頼朝は急使を、向けて、
『九州攻めはよさぬか、敵の本據は九州ではない。四國を討て』
と命じたが、間にあひさうもない。遠隔の征討軍はすでに全滅のほかはない運命にあつた。
京都にある義經に對して、
『急遽、出動せよ』
と、兄頼朝の書狀がとゞいたのはこの際であつた。
義經は、それを見て、
（——身勝手な兄）
と思ふ遑もなかつた。いきなり欣しさが先にこみあげて來たのである。
『これで、兄の怒も解けた。この天下大事の秋に、此身も、死に場所を得たといふもの』
眞實、彼の考へはとたんに死ぬ事であつた。死を誓はずしての今度の出陣などは、彼には、

思ひもよらなかつた。

その日、勢揃ひして、院の御所を拜し、いよいよ戰地へ出發といふ際、彼は、國々の武者共へ向つてかういひ渡した。

『義經、このたび罷り下ろうへは、斷じて、平家を掃滅しつくさねば、生きて還らぬ所存である。萬一にも戰場にて、うしろ足を踏み、命惜しなど思ふ懸念のある者は、遠慮はない。この場から歸れ。打連れてはかへつて源氏の名折。――又、かたじけなくも、われらに降しおかれた勅宣に對して畏れ多い。一歩退くは、一歩、勅宣にそむき奉ることである』

二

隣の部屋の物音に、吉次は寢どこの内で眼をさましてゐた。

朝、眼をさますと、

『おれの持船も、ことし中には百艘にならう。國もとで坑らせてゐる鑛山も、來年からは黄金を生むだらう。夜が明けて、鳥が啼けば、金が殖える――』

と、全財産を計つてみたり、貨幣の運轉を考へてみたりするのが、彼の習性であり、樂しみであり、又その日の生活の始まりだつた。

――が、その朝は、隣の部屋のひそひそ聲や、微かな音が、妙に氣になつて、

『侍といふものは、底の知れないばかな者だ』

と、冷淡にはしてゐても、自分の夢だけに樂しんでもゐられなかつた。

隣には、寺に乞うて、去年から佐藤兄弟が住つてゐた。その繼信、忠信のふたりは、昨夜、

『もう生きてお目にかゝる折もあるまい』

と、改まつて、吉次に別れをのべ、酒を酌み交して寢たのであつた。

今日、義經の出軍に、何と主君から叱られようが、追ひついて、戰に參加するのだといふのである。

『……それを、あんなに？』

吉次には、不可解であつた。侍の心理にあきれ果た。

『死に行くのが、あんなに欣しいものか』

ゆうべはまだ疑つてゐたが、今朝は暗いうちに起き、いそ〳〵と、時折、笑ひさゞめいたりして、この半年、憂鬱そのものだつた兄弟が、まるで今日大空へ誕生でもするやうに嬉々としてゐる氣配なのである。

餘り樂しげなので、吉次は小癪にさはつて、自分も寢床をあげ、妻戸をひらいて、緣へ立出で、

『いよ〳〵お立ですかな』

と、そこをさし覗いた。

若い者たちの血氣の愚を、もう匙を投げて觀てゐるといつたやうな、彼の容子だつた。

『おう吉次か、今、聲をかけようかと思つてゐたところ』

兄弟はすでに鎧を着こみ、太刀を横たへた、清々しげな顏をならべてゐた。

すぐ起つて、

『さらば。そちも健固に』

と、方丈へも挨拶をし、馳け出すやうに、山門から出て行つた。

陽が高くなる。

吉次はいつもの如く朝飯の膳についた。まづさうに箸をおく。すこしぼんやりした顏つきである。

『……』

小半日、陽なたの緣で、膝をくんでゐた。

北側の藪のむかうに、亂立してゐる卒塔婆や墓石が見える。冷たい陽かげの靜寂が、妙に彼の心をひく。陽なたの彼は生物だし、彼方の墓石は永遠の死の群像だからであらう。

初めのうちは、死者と自分は、區別がついてゐたが、いつのまにか判らなくなつて來た。

『…どつちが生きてゐるんだらう？　いつ迄も』

そんな氣がしだして來た。

なぜなら、白骨となつても、生きてゐるものが無數にある。形はないが、文化の流れに、國土のうへに、その仕事や精神を、不朽にのこしてゐる人々の生命力は、過去とはいへ、死滅しないものである。

『……おれは？』

どう生きても十年か二十年にすぎない自己の肉體をながめまはした時、吉次の心は、生きる力とも信じ、歡びともしてゐた國元の莫大な財産が、そこらの日陰に積もつてゐる落葉の山に思はれて來た。

『……變だぞ、今日は』

氣を持直すつもりで、起つて、本堂のはうへ歩いて行つた。すると、わづかな野邊の送り人にまもられて、一つの柩が、御堂へ擔ひあげられて來た。

『――喃。潮音さんも、ひと頃は、平家の公達衆にもえらう騷がれたほど、美しい白拍子ぢやつたが、儚いものよの』

會葬者の一群は、寺の縁にかたまつて、鐘の鳴りだすまでの間を、のどかに語りあつてゐた。

三

その日、四月十二日、頼朝夫妻は、亡父義朝の新廟――南御堂の柱立の式に臨場してゐた。式事もすむ頃――

そこへ、義經からの、壇ノ浦大捷の報を齎して、急使が着いた。

『折も折、この快報！』

居あはせた群臣は、萬歳のどよめきを揚げた。

藤判官邦通は、注進の狀を、高らかに讀みあげた。――海戰の狀況、相互の死傷、生擒つた平家方の諸大將の名までつぶさであつた。

『……』

終ると、頼朝は額づいて、鶴ヶ岡八幡のはうを伏拜んだ。

政子の睫毛に涙が光つた。頼朝の頰にも一すぢ白いものがながれた。

『遂に平家も、亡び去つた』

扈從の臣も、萬感を抱いて、歸館のあとにしたがつた。

老鶯が啼きぬいてゐる。花は落ちて泥土に白い。鎌倉の春も更けたかと想はせる――

日を經て。

頼朝は營中の一室に、梶原景時を近づけてゐた。

『・・・義經が行狀、その後もやはりさうした體が、鎌倉の威力あつての奇功と思はず、總てを、自力と思ひあがつて、我儘を振舞ひをるよな』

頼朝は怒つてゐた。

聰明なる覇者も、佞奸の眼から見れば甘い。覇者なるが故の弱點がある。

『幼少生死にさまよひ、二十年を配所にひそみ、臥薪嘗膽、漸くこゝに至つた覇業を、彼一人のため、私情に紊し、禍根を長くのこしてならうや。主體を保たん爲には、手脚も斷つ』

だが、かうした言を、彼もまつたく苦悶なしには吐けなかつた。自身の矛盾に氣づかぬほどその理性も偏頗ではない。

世の衆望は今、遽に、義經を稱へてゐるが、まだ二十七歳にしてあの才略ある義弟の偉さを、誰より早く又ふかく見拔いてゐたのは頼朝であつた。

――が、感嘆は、恐怖にまで變つてきた。たえず自分との比較の對象にした。小心なと、反

省もしてみるが、無視するには、義經の天質が偉きすぎる。

わけて法皇の寵遇はいよいよ厚く、義經を御信用と聞く。頼朝の心は穩かであり得ない。

ところへ、讒者の畫策も手傳ふやうに、兩者のあひだには種々な事件が頻發した。宿命といはうか不測に起つてくる。

でも、義經は、なほ兄を信じて疑はず、

『やがて、よい御消息も』

と、便りを待ぬいてゐたのである。

それにこたへた頼朝の沙汰は、同月二十九日に發しられた彼への「勘當」であつた。

『おまちがひだ！　何者かの讒言だ』

義經は、火となつた。情に悶へ泣いた。直接、兄に會つて云ひ解けばと――關東へ急ぎ下つた。

が、頼朝は、彼の鎌倉に入るを許さない。

義經は酒匂で止められた。

世にいふ「腰越狀」――あの言々句々、心血にそめた一書を、兄の吏大江廣元に託して、悄然、京へ引つ返した。

その後――

吉野の雪霏々、奥州の秋啾々、巷にも、義經詮議の聲の喧しく聞えてきた頃、誰やら、義朝の廟、南御堂の壁へ、こんな落書をしたものがある。

七歩隔千萬里

と、題して、

豆ヲ煮ルニ豆ノ萁ヲ燃ク
豆ハ釜中ニアツテ泣ク
本是レ同根ヨリ生ズ

相煮ル何ゾ太ダ急ナル

有名な魏の曹植の「七歩詩」である。山僧の業でもあらうか、書體にも寫經風があつた。が、壁の墨痕もいつか春秋の雨や風にうすれてゆく。

幕府鎌倉。

それも遂に、長くなかつた。この時代、ひとり頼朝のみではないが、自己の手脚の主體を知りながら、同根億生の主體たる國土には深く思ひ至らなかつた憾みがある。

作者はいつも、覇者頼朝に、その一點を惜み、人間頼朝に、「豆の詩」を思ふて傷む。

源頼朝　下卷終

源頼朝 下卷
定價(特)一圓八十錢

検印

昭和十六年三月十五日印刷
昭和十六年三月二十日發行

著者 吉川英治

發行人 東京市麴町區有樂町二丁目三番地 朝日新聞東京本社 櫻木俊晃

印刷人 東京市小石川區久堅町一〇八番地 共同印刷株式會社 大橋松雄

發行所 朝日新聞社

910
79

終